

国語科教育研究部 実践資料

【実践例1 授業者：高瀬 美千代 対象児童：4学年3組】

I 授業の実際

1 授業の概要

指導案参照

2 児童の振り返りの考察

国語科では、児童に「わかったこと・かかわり・これから」の観点で振り返りを行うようにしている。本単元全体の学習を振り返りでは、以下のような記述が見られた。

- ・今日は、初めて、会話が多いだけの文章に音読記号を付けて読む勉強をしました。落語には何人もの登場人物が出てきますが、読み方を工夫すれば、それぞれの特徴を表現することができることがわかりました。また、落語には「落ち」というものがあることもわかりました。これからの学習に生かしたいです。
- ・いちばん表現したい部分に音読の工夫を入れることで、より内容が伝わりやすく、面白くなることがわかりました。ライトペアシェアをすることで、どんどん読み方が上手になったのがうれしかったです。前に声が小さいと思っていた〇〇さんが、とても大きな声ではっきりと朗読していて驚きました。
- ・ただ読んでいただけだと、面白くなかった最後の「落ち」の部分に、工夫を入れることによって、こんなに面白くなるんだと初めてわかりました。私は、間をとって小さく読むのがいいと思いましたが、〇〇さんはネズミになりきって、きょろきょろしながら大きな声で「チューチュー」と言っていたのもいいなと思いました。音読を工夫し、ワークシートからはなれても、しっかり読めている人がいました。見習いたいです。
- ・自信をもって堂々と朗読すれば、落語はもっと生き生きとしたものになると感じました。同じ文章でも、表現する人によって、いろいろな変化が生まれると感じました。これからも、自分が読み取ったことをうまく表現できるように音読を工夫したいし、違う表現の仕方はないか、もっと学んでいきたいです。

以上の記述から、「わかったこと」として音読の仕方を工夫することで内容の伝わりやすさや面白さが変わることと「落ち」という話の展開、「かかわり」としてライトペアシェアなどを通して友だちの良さへの気づきや他者との関わりから学びを得たことの自覚、「これから」として話の構成・展開のひとつである「落ち」に着目した読みや音読を工夫していくことを見通していることがわかる。何を学んだのか（資質・能力）、どのようにして学んだのか（主体的・対話的な学び）、学んだことを今後どう活かしていきたいのか（深い学び）を児童たちなりに言語化しているのを見とることができた。

なお、振り返りについては全員が記述することができており、学びを自分事として捉えていることを見とることができた。

3 本実践の成果と課題

(1) 成果

- ・【単元を横断した学びの活用】「最後に落ちがある」という話の展開・構成について知ることは、後期に予定している「モチモチの木」での学習に活かされるものと考え、教科書教材ではない落語を意図的に単元として組み入れた。特に本時では、「落ち」に気づき、音読を工夫することをねらった。その結果、本単元以降、読むことの授業などにおいて児童たちが「落ち」があるかどうかを意識する姿

が見られた。単元を横断して学びを活用していく力がついたことを成果としたい。

- ・【「主体的・対話的で深い学び」の成立】音読を工夫する際、対話を重ねながら、粘り強く試行錯誤している姿がみられたことから、「主体的・対話的な学び」が成立したと考える。またこれまでの学習で積み重ねたものを一つでも多く使って力を発揮しようとしていた姿から、「深い学び」についても達成できた部分があると考えられる。

(2) 課題

- ・「音読」について、工夫すること自体ができていないかと、工夫したいことが実現できているかには差があることが多く、自己評価や相互評価を活かした指導のありかたには課題が残った。例えば、音読を発表する際に、「うれしいという気持ちが伝わるように、高い声で早く読みます。聞いてください。」など、何をどのように工夫しているのかを話してから音読させることで、音読する側には工夫を明確化する力、音読を聞く側には音読の工夫を評価しながら聞く力をつけるようにしていきたい。

【実践例2 授業者：田澤 真也子 対象児童：1学年3組】

II 授業の実際

1 本時の授業の概要

(1) 指導案参照

(2) 授業プロトコルの考察

授業の導入場面で、教師作成の2つのインタビュー映像（①反応なし②うなずきや復唱、感想など話し手の気持ちを考えた反応あり）を見せ、どちらがよりよいインタビューになっているかを比較させた。①の映像がよいという児童たちが3分の1、②の映像がよいと答えた児童が3分の2ほどいた。①②双方に、どこがよかったのかとなぜよいのか理由を聞き、学級全員でどちらがよりよい聞き方なのか対話しながら確認していった以下は、全体対話におけるプロトコルである。

○ 1回目のインタビュー映像視聴後の全体対話

T: ①を選んだ人はどこがよかったですか。

C: 「どんな料理をするのですか。」の質問がよかったです。

C: 普通だと思うんだけど。

C: 下(②)にもあるよ。

T: ②のほうにもあるようですよ。みんなもあるかどうか見付けてみて。

C: あった。

C: 他にも上にあるのが下にあるよ。

T: ①番の人どうですか。上の質問は下にもあるんだって。①番は質問の技をきちんと使っていますね。②番はどうですか。②番を見ていきましょう。

C: ②番にも全部入っています。

T: ②番のよいところはどこでしょう。

C: 「わあ、すごいですね」のところが①にはないのでいいと思いました。

T: どうしていいのかな。

C: 気持ちを言っている。

C: ②は①と違って言葉のキャッチボールをしている。

C: Mさんにちょっと似ていて、相手に合わせて言葉のキャッチボールをしている。

C: 「いろいろ教えてくれてありがとうございます」のところがうれしくなる感じ。

C:ちゃんと気持ちをいっぱい言えていていいと思います。

C:「かぼちゃ丸ごとグラタンを作ってみたい」と、真也子先生（インタビューする側）が今度したいことを言っていていいと思いました。

C:感想を言っていていいと思いました。

T:どうして感想を言うといいのかな。

C:そう言ってあげると相手がうれしくなるからです。

T:うれしくなるのは誰かな。

C:神山先生（インタビューに答えていた側）

T:感想を言ったり気持ちを言ったりすると、相手がうれしくなるんですね。

T:もう一度ビデオを見てみましょう。（*目線にまだ気づいていなかったため）

○2回目のインタビュー映像①を視聴後のつぶやき

C:相手のほうを見ていない。

C:下を見ている。

C:感想を言っていないで、繰り返してる。

○2回目のインタビュー映像②を視聴後の全体対話

C:手で○をだす。

C:やっぱりパー（②）だと思ってきた。

C:グー（①）だったんだけど、パーの人から考えをもらって変わりました。

T:どうして変わったのかな。

C:インタビューには感想はいらないと思っていたけれど、見てみたら、①は下を見ていて残念そうで暗い感じがしたけれど、②は前を向っていて感想も言っていて、神山先生もうれしい感じに見えました。

T:目が合うとうれしいんですね。

C:自分も②番に変えたくなくなりました。①は暗いけれど、②は明るい感じ。

T:気持ちを言ったり感想を言ったりほめたり、目が合ったりすると、何がいいのかな。

C:聞いている人も聞かれた人もいい気持ち。

T:答える人も聞く人もいい気持ちということ、技に入れてもいいですか。誰の技になるかな。

C:聞く人の技。

①を選んだ児童が、②を選んだ児童の「②は、相手に合わせて、言葉のキャッチボールをしている」という発言から、感想や気持ちを話すと相手がうれしくなることに気づき、自分の考えを変容させていく様子が見られた。

ここまでの対話の様子から、本時で気付かせたい「目線」にふれる児童がいなかったため、再度インタビュー映像を視聴した。2回視聴したことにより、「目線」にほとんどの児童が気付くことができた。この時点で①がよいと述べていた児童も②へと考えが変容した。その結果、児童たちからは、「目を合わせたり、感想を言ったり褒めたりすると、聞かれた人も聞く人もいい気持ちになる」というまとめが導き出された。

(3) 児童のノートの考察

本時では振り返りを行うことができなかったが、単元終了時に「わかったこと・かかわり・これから」の観点で、単元全体の学習を振り返らせた際、以下のような記述が見られた。

- ・前の自分は、実は目を合わせて聞くことができていませんでした。でも、この勉強で、聞いている証拠になるし、みんながいい気持ちになるし、明るくなるし、やっぱり大切だなどと思いました。
- ・質問の技と聞き方の技を使うと、相手がうれしくなってどんどん話してくれるし、心のキャッチボールができることがわかりました。ぼくは、インタビューのときにその技を使ってみたら、うまくいきました。
- ・感想を言うと、答える人も自分もいい気持ちになって、答える人もどんどん言いたくなるので、普段の生活やお勉強のときでも使ってみたいです。
- ・質問の技と聞き方の技と書き方の技を合体させたら、紹介文を詳しく書くことができました。他のクラスのお友達にも読んでもらいたいです。

以上の記述から、単元全体を通して、言葉の力の自覚として、質問の技（質問の言葉を使う、相手の楽しいことに合わせて言葉を選ぶ）・聞き方の技（感想・繰り返す・目を合わせる・うなずく）・書き方の技（まとまりで書く）と、その効果や意義について身に付けることができた。また、それを今後の学習や自らの生活に活かしたいという記述も見られたことから、単元を越える学びや言語生活の向上に資する学びを見とることができた。

3 本実践の成果と課題

(1) 成果

- ・【**資質・能力の確実な獲得**】単元構成を工夫したことで、内容面に個人差はあるものの、「インタビューしたことを基に紹介文を書く」という単元のゴールを全員が達成することができた。インタビュー名人の技として、①質問の技、②聞き方の技、③書き方の技というように、身に付けさせたい資質・能力を段階的に組み込み、児童が身に付けられるようにしたことで、どの児童も無理なく学習に取り組むことができた。
- ・【**単元や教科を横断する学びの活用**】単元を展開していく中で、インタビュー名人の技（①質問の技②聞き方の技③書き方の技）が、他へ転移する姿が見られた。例えば朝の会で、係からの発表を聞く際には、「質問の技と聞き方の技を使って聞くぞ。」といった発言や「書き方の技は、絵日記でも使えるね。」などといった発言である。また、実際に感想を述べたりうなずきながら聞いたりする姿を見た他の児童が「名人！」と声かけをする姿も見られた。学びを本時・単元・教科に留めず、他教科や日常生活でも活用を図ろうとしていた。
- ・【**教師の支援を介しての対話的な学び**】本時の対話場面は、教師を介して児童の対話をつないでいくこと全体対話で進めた。考えを広げたり深めたりする過程では、新たな考えに出会わせることが重要である。なぜなら、他者の考えを聞くことで自分の考えが再考され、吟味・精査されるからである。本時では、2つのインタビューのどちらがいかとその理由という、整理された立場での対話であったが、友達の考えを聞いて自分の意見を再考したり変容させたりした児童も見られた。今後は自分たちで意見を広げたり深めたりするような対話ができるように支援したい。そのために、児童が友達と話したくなるような必然性のある課題設定の工夫や身に付けたい資質・能力を意識した対話の設定（タイミング・形態）などを考慮していきたい。

(2) 課題

- ・本時では、活用や振り返りの場面まで進むことができなかった。原因として、教師自作のインタビュー映像の内容が複雑だったことが挙げられる。質問の答えに対し感想や復唱などを述べるやり取りが何回か続くインタビュー映像だったため、情報量も多く、どこを比較してよいのか悩んでいた児童も見られた。本時の構成を学習者の様子に応じて柔軟に対応できるように予定することが課題であると

考える。

4 協同研究者（弘前大学教育学部 鈴木愛理先生）より

- ・田澤先生の学級では、子どもたちの国語学習に対する意識や意欲の高さが感じられる。人と違う意見でも素直に発表する姿やこれまでに学んだことを口走る姿にそれを見ることができている。
- ・インタビュー映像を見せた際、①を支持する学習者が一定数いたのは、授業の最初に既習事項として振り返った「質問の技」が達成されているかどうかという視点で映像を視聴した結果であると考えられる。その視点で見た場合、①も②もよいものに見えたことだろう。また、これまでに学んでいない「感想を述べること」などはインタビューにおいて余計なこと、なくても構わないことだと思っただのかもしれない。必要な情報を短時間で聞き出さなければならない場合であれば必要最低限の質問事項を手短かに聞くという方法も決して間違いとは言えない。子どもたちが②のよさに初めから気づくように本時のめあてや導入を工夫するとすれば、「より気持ちよくインタビューを受けてもらえる工夫を考えよう」など、本時で考えたいことをより具体的に共有しておくことも一案であろう。
- ・田澤先生の見通しとしては①を支持する学習者はもっと少ないはずであったそうだが、①をよいとした児童が3分の1いたことで、②がよいと思った3分の2の児童とその理由について聞き合う対話が自然と活発になることにつながったので、結果的にはよかったのではないかと考える。平成29年告示の学習指導要領では、「主体的に学習に取り組む姿勢」として粘り強く学習を調整することを求めている。今後は、学習者が試行錯誤する時間的余裕も授業に組み込んで考えていかなければならないのかもしれない。
- ・本時で学んだことは、よりよい聞き手として普段から何気なくしていることでありながら自覚されることが少ないことでもあっただろう。例えば、教師は授業で児童の発言に頷いたり、コメントや感想を付け加えたりすることで児童の発言を促しているが、それを板書に残したりはしない。児童は発言を促す聞き手の工夫に日々ふれているものの、それを工夫として自覚するためには学習する機会をもつことが必要であることが改めてわかった。同様のことは国語科の他の学びにも言え、普段していることでも力として意識されていないために必要なときに発揮できないことがある。言語生活と教室とを往還する学びを促すためにも、言語生活の振り返りから言語行為における課題や意義をみつけることを授業に取り入れていければ理想的である。
- ・「比べて考える」という学習方法に関する知識は、単元や教科を超えて活用できるものとして意義があったと考える。ただ、1年生という発達段階を考えた場合、「比べて考える」ためにはどうしたらいいのか、段階を踏んで教える必要があったのかもしれない。例えば、①と②で違うところに線を引き、①と②の異なりを全体で共有してから、どちらがいいのか、またその理由について個人で考えさせることで、「比べて考える」とはどういうことなのかを学ぶこともできるのではないかと考える。